九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ア列音の機能とク語法

福田, 良輔

https://doi.org/10.15017/2332791

出版情報：文學研究. 65, pp.1-15, 1968-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ア列音の機能とク語法

福田良輔

一

古代日本語の動詞型活用語には、ア列音から体言または動詞に付いた事例がかなり多く見出される。しかも、これらの事例はいずれも複合語であることは、このような語構成法が、上代でも古い時代からすでに存在していたことを示唆している。文献以前、つまり史前日本語時代に盛行していたのが、文献時代に入っては衰退していたものと考えられる。その事例を次に記すことにする。

向股（向か股―記）、牟良登理（群ら鳥―記）、枯山（枯ら山―記）、阿佐遅波良（浅さ茅原―記）、加良奴（枯ら野―記）、阿娑努（浅さ野―紀）、訶羅怒（枯ら野―紀）、茂羅玖毛（群ら雲―紀）、叢雲（群ら雲―紀）、枯樹（枯ら樹―紀）、麻我許登（祝詞）・悪事（曲が事―記）、勾璁（記）・曲玉（曲が玉―紀）、玖訶瓮（潜か瓮―記）、区訶陀智（潜か役―紀）、須多杯（捨た瓮―紀）、乾迹（乾ら跡―紀）　以上記紀

荒垣、阿良久佐（荒ら草）、嵐、荒波（荒ら波）、安良野（荒ら野）、荒山、荒人神（現―生―ら人神）、浅茅（浅さ茅）、晩（暮）闇（晩ら闇）、安可等吉（明か時）、村山（群ら山）、武良奈倍（群ら苗）、村肝乃（群ら

肝の)、行滕(向か脛)　以上万葉集

以上の事例以外にも、動詞のア列音語尾から体言に付いて体言を修飾する事例が、なお記紀その他の文献に見出されるであろう。

「向く」「浅す」「明く」は、四段活・下二段活の両方に活用したようである。「群る(群る)」「荒る」「現る(生る)」「晩る」「曲ぐ」「捨つ」「乾る」は、いずれも下二段活である。「潜く」はおそらく四段に活用していたと推定される。

なお、伊勢物語に見える東国の民謡系と思われる歌「夜も明けばきつにはめなむ、くたかけのまだきに鳴きて背なをやりつる」の「くたかけ」は、「腐鶏」で、「腐た鶏」である。「腐(朽つ)」は上二段活であり、万葉集には、「腐つ」と四段活「腐す」が見える。上二段活「腐つ」が、「鶏」を修飾するために、ア列音語尾をとったのである。

眵　万久曾(新撰字鏡)　マクソ(類聚名義抄)

とあるが、新撰字鏡・和名抄・類聚名義抄・色葉字類抄その他に「メクソ」とも訓まれている。「目糞」の意である。

膜　マケ(色葉字類抄・類聚名義抄・字鏡集)

は「目気」、即ち「目の病気」の意である。源氏物語の紅葉賀の巻に「マガハ(目皮)」は「マブタ」の意である。「マナブタ」はすでに万葉集巻十六に「瞼」を「マナブタ」と訓ませているが、「マブタ」は字鏡集まで下っても見えない。ともあれ、複合名詞の「目糞」「目気」「目皮」の「目」がア列音であることは、下の「糞」「気」「皮」を修飾することを表わすものである。

「罷る」は「目離る」、「参る」は「目居る」、「守る」は「目守る」、「ま妙し」は「目妙し」、「紛はし」は「目霧らはし」であろう。仁徳記に「来入り麻（紀、摩）韋来れ」、万葉集に「末烏し」「麻為出」「麻為来む」等の事例から推量するに、古くは上一段活「目居る（参る）」があったようである。これらの複合語はすべて上代に文証ある事例であるが、複合語が動詞にしても形容詞にしても、「目」が「マ」となって下の用言を修飾しているのである。「目な間」「目な子（瞳）」「目つ毛（睫）」のように、「な」「つ」の古い格助詞がついて下の名詞に連なるばあいも、「マ」とア列音をとるのも、下の名詞「間」「子」「毛」を修飾しているためである。「メグソ（目糞）」より「マグソ」、「メジリ（背）」より「マナジリ」が、それぞれ古い形であろう。なお、「目守る」の「守る」も、「目（甲mo——古事記に限る——）る」と思われる。「ま見ゆ」が「目見ゆ」であるのと同じ事例である。しかして、名詞「目」は乙mëであり、上一段活「見る」の「見」は、すべて甲miである。「見（召・食）す」の「見」は甲meである。一音節の語根が、／a／i／e／ë／o／と活用し、つまりC＋Vの一音の語根の母音が交替することによって語法上の機能や品詞性を変える。母音がaをとるばあい、下の語の体言・用言を修飾する機能を表わして、複合語を構成する。

tamötö（手本）tabi（手火）tasuki（手繦）tatikara（手力）tawojame（手弱女）tatukatuwe（手束杖）

tamaki（手纏き）tamukafi（手向かひ）

tawöru（手折る）tanigiru（手握る）

体言「手」の母音が下に付く体言または動詞を修飾するために、aと交替したのである。

向か伏す極み。武哿さ屢楼（向か離くる—紀）朝日能豊逆（栄）登爾（朝日の豊栄登りに—祝詞）

「向か伏す」「向か離くる」は、共に二つの動詞から構成された複合動詞の前項がア列音をとって、後項の動詞を修飾している。「豊栄登り」の「豊」は、「豊寿き、寿き迴ほし（仲哀記）」の「豊」と同じく、複合語「栄登り」を修飾する接頭辞的美称である。「朝日の豊栄登り」は、祝詞の慣用詞句で、「さか」が「栄」で表記された事例六、「逆」で表記された事例三である。「逆」で表記したのは単なる借訓ではなく、「栄」と「逆」とが語源を同じくしていることにも本づくと思われる。

sa-ku（裂へ・割へ・放へ・避へ・開へ・咲へ）　sa-ru（去る・離る・避る）　sö-ku（離へ・退へ）
sö-ru（逸る・反る）

において、母音交替と接尾辞の相違、さらに四段活、下二段活、また同じ動詞の四段、下二段両活等の相違によって生じた意義分化の現象を相対的に考慮するに、

逆葺く（万葉、巻八、一六三七）、逆巻く（万葉、巻十一、二四三〇）、溯る

の複合動詞の前項「逆」も、／sa-ku（裂へ・割へ・放へ・避へ・開へ・咲へ）／と語源を同じくするものではないだろうか。花の蕾の花弁が「割（裂）けて」、花が「咲（開）く」ことになる。「裂く」は同体であったものが「離れる」ことであり、同体であったものから「避ける」ことであり、同体であったものと「反れ」、逆な方向に向こうことである。したがって、「逆か―葺く・巻く・登る」の複合動詞の前項の「逆」は、後項を修飾するために、「避く」がア列音をとったものと解することができよう。したがって、「逆剝」の「さか」も同じであろう。／sa-ru／は、空間的にも、時間的にも、もしくは心理的にも、移動することが、本来の意味である。したがって、去ること、来ること、行くこと、遷ることを意味するが、ある時処から「離れる」「移動する」ことで

ある。したがって、「春されば」「夕されば」が「春になると」「夕方になると」となるのである。

ともかく、動詞＋動詞の複合動詞において、前項の動詞が後項の動詞を修飾するばあい、前項動詞の活用の種類に関係なく、ア列音語尾をとる修飾形があることは認めて差し支えない。「生き死に」「行き帰り」「咲き散る」「読み書き」等の複合語において、前項と後項とが意味的対立関係にあるものにおいては、前項がア列音語尾をとることはない。とはいえ、修飾語が被修飾語の前に位置するのが、原則的に国語の特質であるから、一般的には前項動詞がア列音をとらない複合語においても、後項の動詞との関係は修飾・被修飾の関係にある。

二

以上述べたことにより、動詞＋体言・動詞＋動詞等の語構成の形式を有する複合語において、前項の動詞がア列音語尾をとることは、修飾機能を表わすもので、後項が体言である複合語においても、本来的意味での連体形の機能を表わすものではないのである。このように、前項の語がア列音をとって、後項の語に付いて複合語を構成する語構成法は、体言においても見られる。

アメ（天）→アマクモ（天雲）・アマヂ（天道）
アメ（雨）→アマヨ（雨夜）・アマゴモリ（雨隠）・アマギリ（雨霧）
カゼ（風）→カザマツリ（風祭）・カザハヤ（風早）
サケ（酒）→サカヅキ（酒杯）・サカブネ（酒船・酒槽）
タケ（竹）→タカムラ（竹叢）・タカトリ（竹採）

テ（手）→タモト（手本）・タチカラ（手力）
シロ（白）→（白雪）・シラタマ（白玉）・シラクモ（白雲）
フネ（舟）→フナビト（舟人）・フナダナ（舟棚）
ムネ（胸）→ムナチ（胸乳）
メ（目）→マヘ（前―目辺）・マガハ（目皮）

これらの事例については、有坂秀世博士の「国語音韻史の研究」に詳しく、原名詞のエ列音は乙類または乙類相当のエ列音であり、それがア列音に交替し、修飾することは、専門の人には周知のことである。

前項の名詞と後項の動詞とから構成された複合動詞においても、前項の名詞の語尾がア列音をとる。

a安麻照らす神（万葉、巻十八、四一二五）、b阿麻飛ぶ鳥（允恭記）、c阿麻翔り、見渡し給ひ（万葉、巻五、八九四）、d安麻降り、知らしめしける（万葉、巻十八、四〇九四）、e佐加漬くらし（雄略記）、f布那飾りい帰り来むぞ（允恭記）、布奈飾り（万葉、巻二十、四三二九）、布奈競ふ堀江（万葉、巻二十、四四六二）g多握り持ちて（万葉、巻五、八〇四）、多握り持たし（万葉、巻二十、四四六五）、h安麻隠り物思ふ時に（万葉、巻十五、三七八二）、i牟那見る時（神代記）、k多多並めて

a・b・c・dは、アメ（天）がアマ、eは、サケ（酒）がサカ、fは、フネ（船）がフナ、gは、テ（手）がタ、hは、アメ（雨）がアマ、iは、ムネ（胸）がムナ、kは、タテがタタ、とそれぞれエ列音がア列音になって、後項の動詞を修飾している。しかしてこれらのエ列音の母音はいずれも乙類ëもしくは乙類相当の音であることは周知の通りである。

a多迦斯理（高知り―記）、b多迦比迦流（高光る―記）、高光（万葉）、c高照・高輝（以上万葉）、d多迦由久夜（高行くや―記）

これらの「高」は形容詞「高し」の語幹と見ることができる。しかし、「布刀斯理（太知り―記）」のように、「太し」の語幹「太」がア列音をとっていないことを見ると、「高」の方は、前記の「天照らす」「船飾り」などの一群の事例と同じく、名詞「タケ（岳）」の語尾が修飾機能を表わすためにア列音をとった「タカ」が、形容詞「高し」の語幹となったものと思われる。

Aa伊多那加婆（甚泣かば―記）、b伊夜佐岐陁豆流（弥前立てる―記）・伊夜等保曾吉奴（いや遠ぞきぬ―万葉、巻十四、三三八九）・伊夜等保奈我伎（いや遠長き―万葉、巻十四、三三五六）・伊夜袁許邇斯豆（いや愚にして―応神記）・いや遠に（万葉）・いや高に（万葉）・伊也乎知爾（いや変若に―万葉、巻二十、四四四六）・弥年爾（いや年に―万葉、巻十九、四二二九）・弥痩爾（いや痩せに―万葉、巻八、一四六二）・いや益しに（万葉）・いや益益に（万葉）・いや頻頻に（万葉）・

Ba伊多母須敝奈之（いたも術なし―万葉、巻十五、三七八五）・痛毛為使奈美（いたも術無み―万葉、巻三、四五六）、伊刀母須弊奈之（いとも術なし―万葉、巻二十、四三八一）、c伊登禰多家口波（いと妬たくは―万葉、巻十八、四〇九二）・甚恋目夜裳（いと恋ひめやも―万葉、巻八、一四二五）・伊等乃伎提（いと除きて―万葉、巻五、八九二）―伊等能伎提―八九七）

右のA・Bの事例を対照すると、「イタ」に対し「イト」、「イタモ」に対し「イトモ」がある。「イヤ」に対する「イヨ」は見当らないが、伊与余（巻五、七九三）・伊余与（巻十八、四〇九四）・伊与余（巻二十、四四六

七）が万葉に見える。「イヨヨ」は「イヨイヨ」の縮約形である。「イタ」と「イト」、「イヤ」と「イヨ」は、母音交替で、「イト」「イヨ」の「ト・ヨ」は乙類ö で、a がö に交替したもので、「イタ」「イヤ」が古い形で、「イタ（モ）」「イト（モ）」「イヤ」「イヨヨ」は一往副詞と見ることができる。しかし、「モ」が付かないで、「イタ」「イヤ」とア列音から下の語に直接すると、複合語としての性格を帯びてくる。それは、語尾のア列音が修飾機能を有するからである。「伊多豆（痛手―仲哀記）」は、「イタ」が名詞を修飾した複合名詞である。

したがって、副詞の中にも、その語末音がア列音と交替することによって、それが修飾する語と結合して新に複合語を構成するものがある。

三

以上、考察したところによって、古代語においては、動詞はその活用形の種類にかかわらず、また体言・副詞の無活用語においては、語末音がア列音と交替することによって、形容詞の語幹の末音がア列音であるものは、語幹がそのままで、直接する下の語を修飾して、複合語を構成する、複合語構成法の一形式が存在していたことが明らかになったのである。しかして、このような複合語の語構成法は、上代でも古い時代の文献に多く現われ、文献時代につながる史前日本語時代、すでにこのような複合語の語構成法が行われていて、奈良時代はどちらかといえば、特定の語につづく以外は、むしろ衰退期に臨んでいたものと思われる。

山振の立ち儀ひたる山清水酌みに行かめど道之白鳴（巻二、一五八）

磯ごとに海人の釣船泊てにけりわが船泊てむ伊蘇乃之良奈久（巻十七、三八九二）

春なれば宜(うべ)も咲きたる梅の花君を思ふと夜眠(よい)も禰(ね)奈久(なく)燕（巻五、八三一）

情ゆも吾(わ)が思わざりき山河も隔莫国(へだたらなくに)かく恋ひむとは（巻四、六〇一）

右の四首中、はじめの二首の「道の知らなく」「磯の知らなく」は、格助詞「の」を受ける述語であるので、その終止は連体形乃至準体言と見るのが至当であろう。後の二首の「寝(ね)なくに」「隔(へだ)たらなくに」も、助詞「に」が付いているから、「寝なく」「隔たらなく」の「なく」が、前の二首の「なく」と同じく連体形乃至準体言である。「知ら」「寝(ね)（下二段活「寝(ぬ)」の未然形）」「隔(へだ)たら（四段活「隔たる」の未然形）」であることには異論はあるまい。このように、未然形に「なく」「なく」「なくに」がついているので、「なく」の「な」は、「な（未然）・に（連用）・ぬ（終止）・ぬ（連体）・ね（已然）」と活用したと思われる古い時代の否定助動詞「ぬ」の未然形に「く」が付いたものと、一往思われる。しかるに、上の述語を体言化していることは、今見た通りである。その品詞性は体言的であり、「なく」「なくに」の「く」に関する限り体言的接尾語と見るべきである。

ところで、注意すべきことは、体言的接尾語でありながら、否定助動詞「ぬ」の連体形「ぬ」に付かないで、「な」に付いていることである。形式的には未然形「な」についているのである。それは、ついているように見えるのである。ところで、すでに述べたように、「動詞＋体言（名詞）」の語構成の複合名詞において、前項の動詞の活用の種類にかかわりなく、動詞の語尾がア列音をとるばあい、前項の動詞は、後項の体言を修飾するのである。四段活動詞及びナ変・ラ変動詞型の活用語の未然形はア列音であるので、すべての動詞型活用語がア列音をとって、後項の語を修飾する形式と、四段活及び準四段活型の活用語のばあい、修飾形と未然形とが形式的には一致する結果となるのである。動詞のみならず、体言・形容詞の語幹・副詞等の他の品詞においても、語尾が

ア列音をとるばあい、そのア列音は修飾機能を有していることも、すべて述べたところである。

「なく」の「な」は体言的接尾語「く」を修飾するために、「な」が「ぬ」と交替したのであり、「な」に体言的接尾語の「く」が付いたのである。

四

このように見てくると、「ク語法」で、動詞型活用語においては、動詞・助動詞ともすべて、ア列音から「ク」が付く理由も、従来の説よりは、より具体的に合理的に説明が付くかと思われる。それは、繰り返しいうようであるが、体言・動詞・形容詞の語幹・副詞等の語尾がア列音をとるばあい、つまり語尾母音がa母音と交替するばあい、ア列音をとった語に下接する語を修飾することである。

「ク」は体言的接尾語である。しかして、四段活・上一段活等の動詞においては、終止形と連体形とは同形であるから、連体形に体言的接尾語が付き、連体形が「ク」を修飾することになるから、修飾機能を有するア列音をとったのである。例えば四段活・上一段活の動詞について

動詞	終止形	連体形	ク語法
四段	ifu（言）	ifu	ifaku
上一段	miru（見）	miru	miraku
ラ変	ari（有）	aru	araku

ラ変活は、終止形と連体形とは語尾母音が異なるだけで、連体形がル語尾でないから、ク語法では、四段活・

上一段活と同じ付き方を、「ク」がしている。連体形がル語尾を有する上二段活・下二段活・カ変活・サ変活・ナ変活の動詞では、

動詞	終止形	連体形	ク語法
上二段	otu（落）	oturu	oturaku
下二段	tugu（告）	tuguru	tuguraku
カ変	ku（来）	kuru	kuraku
サ変	su（為）	suru	suraku
ナ変	inu（往）	inuru	inuraku

これらの動詞の連体形においても、体言的接尾語「ク」を修飾するために、連体形の語尾母音uと母音aが交替したのである。動詞型活用をする助動詞についても、すでに述べた四段活の古い否定助動詞「ぬ」をはじめ、四段活型と思われる推量「む」、下二段活の完了存続態「つ」、ナ変型の完了「ぬ」、ラ変型の存在態「り」、過去（回想）「けり」、断定「なり」等いずれも動詞の各活用形と同じ形式で、体言的接尾語「ク」につづいている。

本稿の冒頭に掲げた「動詞＋体言」の語構成の複語名詞において、前項の動詞の連体形語尾がル語尾である動詞も、ル語尾を有しない動詞と同じく、ル語尾を除いた活用形の語尾がア列音をとって、後項の体言につづいていることは、ア列音が下接する体言を修飾する機能を有していたことによる。この事象にも、他の活用形と連体形成立の年代的差異を示唆するものがある。「枯ら野」「向か股」等の一類の複合名詞の存在は、語尾音がア列音と交替して下の語を修飾する、即ち下につながる機能を表わす語構成法が、古くから存在していたことを裏書き

するものである。古い語法が複合語の中に見出された一つの事例といえよう。

筆者は、体言的接尾語「ク」は、動詞型活用語、形容詞型活用語のいずれにおいても連体形に付いたもので、動詞型活用語に付くばあい、動詞の連体形のウ列音が、「ク」が付くことによりア列音に交替したものである、と述べたことがある。（「文学研究」第五十輯、昭和二十九年十二月、「古代語法存疑（その二）」三七、八頁参照）それは、終止形と連体形とが同形である動詞型活用語において、かつては終止形と連体形とは、母音の相違があった時代があったと推定していたのである。このような推定は、筆者だけではないようである。（現在でも筆者は、終止形語尾母音と連体形語尾母音とは異なっていた時代があったと仮定することは変らない。）当時筆者は、そのかつての連体形の母音が、o・ö・u・üなどのいずれにしても、それにつづく「ク」の母音との関係において、また接尾辞が付いて、新たに派生動詞が作られるばあいのア列音（即ちa母音）の機能のために、「ク」につづくために、母音がaに交替したものと考えていたのである。しかし、この母音交替説は、理論的であっても観念的であり、具体性を欠いていたためか、井手至氏は、連体形にクが付いたものとする卑説を認めながらも、母音交替説についてだけは、氏の批判を受けた。（「解釈と鑑賞」昭和三十九年十月号所載「ク語法（加行延言）アクの説は悪説か」）

しかして、動詞の語尾が、体言・副詞の語尾と共に、下接する語を修飾するために、ア列語尾に、つまり語尾母音uがaと交替するのは、上代でも古い時期、文献時代の当初から存在していた語法である。体言的接尾語「ク」につづくために、動詞の連体形語尾がア列音をとったのが、動詞における「ク語法」である。形容詞においても、連体形の古形語尾「ケ」（甲類）にクが付くのが、形容詞の「ク語法」である。形容詞の連体形「キ」

の古形に「ケ(甲類)」があり、奈良時代の大和地方を中心とする中央語系にもその痕跡が見出されるが、奈良時代の東国方言には多くの事例が見出される。それは、古い語法が東国地方に残存している事例の一つである。ただ、甲類「ケ」が乙類「け」に混同されている事例が多いのは、東国方言の成立事情に因るものである。これらの事については、筆者はかつて述べたところである(「文学研究」第四十八輯、昭和二十九年三月所載「古代語法存疑(その一)」、「万葉集大成」言語篇「東歌の語法」、「奈良時代東国方言の研究」昭和四十年六月、風間書房発行)。

なお、次のような事例が巻十四の東歌に、わずか一例に過ぎないが、見出されることは、形容詞においても、さらに古い時代は、「ケ(甲類)」からではなく、ア列音の「カ」から「ク」が付いていたことを思わせるものがある。

之牙可久爾(繁かくに、三四八九)

「カ」は中央語系の「ケ(甲類)」の東国方言的訛音と見ることには、躊躇されるものがある。動詞型活用語におけるク語法においてはすべてア列音から付き、それに東国方言では、中央語系の形容詞の古形「――ケ(甲)」「シケ(甲)」の「ケ」が、「カ」となって現われている事例がかなりあるからである。

国の登保可婆(遠かば、三三八三)、まさかし余加婆(良かば、三四一〇)、等抱可騰母(遠かども、三四七四)、安夜抱可等(危ほかど、三五三九)、伊伎都久之可婆(息つくしかば、四四二一)

とすると、「繁かくに」は、形容詞のク語法の最も古い形が残存していた稀な事例と見ることも可能である。

五

ク語法のクは、イヅク・コモリク（隠久）のクと同じく、またココ・ソコのコ、アラカ（在処・殿）・オクカ（奥処）のカと語源を同じくするものと思われ、場所や事を意味する体言的接尾語である。形容詞の連用形「ク」「シク」のクも同一語源であろう。用言の連用形の機能の一つには、述語的であると同時に体言的機能を表わすものがある。

故非之久能（恋ひしくの）多かる吾（わ）れは（巻二十、四四七五）

などの用法は、形容詞の連用形が、動詞の連用形と同じく述語名詞としての機能を端的に表わしている事例の一つである。それは、形容詞の「ク」「シク」の「ク」が、ク語法のクと同語源で、かつては体言的接尾語であったことにある。

すでに触れたように、動詞のク語法は、体言的接尾語「ク」を修飾するために、ア列音の修飾機能が作用して—採り入れられて—連体形のウ列音語尾がア列音語尾となったのである。記紀と万葉集とを比較して、記紀には動詞のク語法の事例数は極めて少なく、形容詞のク語法の事例数が多く、万葉集には、比較的に、逆に動詞のク語法の事例数が多く、形容詞の事例数が少ないことは、井手至氏の指摘された通りである。（「人文研究」第十六巻、第三号、昭和四十年三月所載「万葉集のク語法」）動詞のク語法と形容詞のク語法とは、発生的にいずれが先であるかは、にわかに決めかねるものがあるが、形容詞的用法が先ではないかと思われるのである。

ク語法については、まだ論ずべき事項が少なくないが、原稿締切りの期日もすでに過ぎているので、一往筆を

措くことにするが、古代日本語におけるア列音（a）の修飾機能を考察することにおいて、動詞においても、結果的にはクが連体形に付いたものであり、無活用語の語として、その語形がア列音に終わっている語を除いては、ア列音は切れる音ではなく、必ず下に続く音であること、また下接の語を修飾する音であることについて、概説し得たと思う。